

十字架物語外伝

～パラダイスに迎えられた男～

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

★登場人物-----

ルベン(ナレーターも)

ルベン(子供時代)

母

父

叔父

叔母

ダン

律法学者

祭司長

兵士1

兵士2

裁判官

男

女

子供

マリヤ

イエス

イエス(子供時代)

<前編>-----

男 「見ろよ、あいつらを。いいざまだぜ。」

子供 「お母さん、あの人たちはいったい何をしたの？」

女 「いいかい、人殺しをするとああやって十字架に磔にされるんだよ。よく覚えておおき。」

N 人々が恐れとあざ笑いの入り交じった顔で俺たちを見ている。今俺たち3人はユダヤの刑罰の中でも最も重い十字架の刑に処せられているのだ。両手両足に太い釘を打たれ、十字に組んだ木の柱に生きたままかけられる・・・。
エルサレムの城壁の外にある小高い丘、ゴルゴダ。「どくろ」と呼ばれるこの丘に俺たちはさらしものになっていた。強盗殺人をした俺ともうひとり、真ん中には名高い預言者のイエス・キリストという男・・・。この人は、ユダヤ中で知らないほど有名な預言社で、神の国の教えを宣べ伝え、人々の病を癒していた。俺たちユダヤ人は、この人こそローマ定刻の圧制から救い出してくれるメシヤ、キリストだと望みをかけていたが、律法学者やパリサイ派のラビたちに妬まれて訴えられ、こうして死刑になったのだ。俺たちと違って死刑に当たる

ような悪い事は何一つしなかったのに。何でも直接の罪状は、連中や、大祭司カヤパとか、総督ピラトなんてお偉方の前で、はっきり「自分は神の子キリスト、ユダヤ人の王だ」と言ったことかららしい。イエスの頭上には「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」という罪状書きが掲げてあった。

兵士 1 「さあ、この葡萄酒を飲め、飲むんだよ。」

N 兵士のひとりが、苦みをまぜた葡萄酒を無理矢理イエスに飲ませようとしたが、彼はなめただけで飲もうとはしなかった。

兵士 2 「お偉い預言者様にはお口に合わなかったと見える。」
(兵士一斉に笑う)

N ののしているやつらの中には、俺も見たことのある祭司長や律法学者たちもいて、口々にこんなことを言っている。

律法学者「神殿を打ち壊して 3 日で立てる人よ。もし、神の子なら、自分をすくってみろ。」

人 1 「そうだ、そうだ。十字架から降りてこい。」(皆、口々に)

律法学者「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王様なら、今、十字架から降りて貰おうか。そうしたら我々は信じるから。」

祭司長「イエスは神により頼んでいる。もし神の子なら、いま救っていただくがいい。『私は神の子だ』と言っているのだから。」

十字架男「おい、お前。イエス、キリストさんよ。俺たちのことも救って見ろよ。」

ルベン「救い主なんだろう。俺たちのことも助けてくれよ。」

N 陽が照りつけてきた。喉が焼け付くように痛い。太い釘が打ち込まれたその傷口から血がじわじわと流れ出ているのがわかる。体の重みで足が鉛のようだ。

ルベン「ちくしょう、ひと思いに殺せ、殺してくれ。」

N 十字架刑は一日二日では死ねない。一週間いや、それ以上野ざらしにされ、炎天下、傷口は化膿して高熱と痛みで全身を苛まれながら、やがてミイラの様になって死んでいくという。

モノ「俺もいよいよ死ぬのか…。いや、俺には、こんな惨めで残酷な刑罰が子供の頃から定まっていたのかも知れない…。」

母 「さあ、暖かいうちにお食べ。」
ルベン 「うん・・・。」
父 「馬鹿野郎、こんなガキに、そんなに食わすことないんだ。」
母 「でも、あんた、この子は食べ盛りなのよ。」
父 「くそっ、まったく、このごくつぶしが。」

N 俺はナザレの貧しい百姓の家に生まれた。七人兄弟の一番下。上の兄弟たちはみな、エルサレムやエリコなどの大きな町に出稼ぎに行っていたが、まだ幼くろくな仕事もできなかった俺は、親にとっては厄介物だった。家にはいつも金はなく、俺は腹をすかしていた。

母 「さあ、ルベン。こっちおいで。」
ルベン 「母ちゃん。」

N お袋だけが小さな俺に優しくしてくれた。

ルベン 「あっ、いちじくだ。うめえ。」
母 「おいしいかい。また持ってきてやるからね。」
ルベン 「まってろよ。母ちゃん、俺、偉くなったら一生懸命働いて、ごちそう腹いっぱい食わせてやるからな。」
母 「ありがとう。楽しみにしてるわ。」

N 俺が7才になった年、畑で作っていた葡萄が半分以上枯れた。さらに悪いことは重なるもので母が病気になり、寝たきりになってしまった。親父には小さな子供の面倒までみられない。俺は親戚の家に預けられることになった。

叔母 「ほらほら、この小麦粉も運ぶんだよ。まったくはかどらないったらありゃしない。」

N 粉屋の叔父の家では小麦粉の運搬が仕事だった。子供の俺にはいくらも運べない。毎日くたくたになって、ぼろ布のようになるまで働いた。ある夜、叔父と叔母が声を潜めて話しているのが聞えてきた。

叔父 「何だって、あんな役にも立たないガキを預かったんだ。」
叔母 「そんなこと言たって、仕方ないじゃないか。兄さんに泣きつかれちまったんだから。お前さんだって最初はいいって言っただろ。」
叔父 「ああ、もうちょっと骨があるかと思ったんだがな。おめえの兄貴にや、まんまといっぱい食わされたぜ。」

N 俺は、どこへ行ってもやっかいものだ、役立たずなんだ。そう思った。
..そして一年もたたないうちに、優しかった母が死んだ。俺は葬式の時も、叔父叔母の前でも決して涙を見せなかった。

モノ 「平気さ。母ちゃんが死んだって。どうせ俺は独りぼっちなんだ。..泣くもんか。..泣くもんか..。」

N 粉屋に向かう街道沿いを、俺はたった一人で歩いていた。

イエス 「どうしたの？」

N 優しい声がした。見ると、俺といくらも年が違わない少年が立っていた。やせっぽっちで貧しい身なりをしていた。背中には大工道具を背負っている。

ルベン 「..母ちゃんが、死んだ..。」

N ふいに涙が出た。少年の暖かい眼差しに、我慢していた涙が止まらなくなったのだ。少年は、しばらく俺と一緒に歩いてくれた。

少年 「心の貧しい者や悲しむ者は幸せなんだよ。天国はその人のものなんだから。」

ルベン 「天国が俺のもの？だったらうれしいな。ここじゃ俺の居場所、どこにもないもの。」

N 彼は神の国が近づいていることや、俺たちのような学の無い貧しい人間でも、神様は差別なさらぬことを話してくれた。俺はその見知らぬ少年の言うことが本当だったら、どんなにいいだろうと思った。

マリヤ 「イエス、イエス、どこに居るの？」

イエス 「ここです、お母さん。じゃ、僕行くね。」

ルベン 「じゃ、な。」

N 俺はイエスと呼ばれたその少年と、母親らしき女の人、弟、妹たちが遠ざかって行くのをいつまでも見送っていた...。
それから数年たったが、いつまでたっても親父からは何の連絡もなかった。

ルベン 「もう一度、もう一度言って見ろ。」(叫んで)

叔母 「ああ、何度でも言ってやるさ。お前は親兄弟に捨てられたんだよ。」

叔父 「な、ルベンわかるだろ。お前の親父が夜逃げして、借金をわしらが肩代わりしなくちゃならねえ。お前が代わりに給金なしでここで働くのは、当たり前の話だろう。」

叔母 「食わせてやってるだけでもありがたく思うんだね。」

モノ 「逃げよう、ここから逃げてやる。」

N もう、誰も味方はいない。その晩逃げ出す決心をした。エルサレムに行けば何とかなるに違いない、そう、思ったのだ。とにかく金が欲しかった。叔父たちが寝静まったのを見計らって、俺は金のある部屋に忍び込んだ。

ルベン 「金だ…。これさえあれば…。」

叔父 「(するどく)誰だ。」

ルベン 「！」

N 叔父はすぐに、俺が金の袋を握りしめているのに気付いた。

叔父 「ルベン、お、お前、まさか…恩を仇で返す気か。どこまでずうずうしい奴だ、お前は。」

ルベン 「ちくしょう…。」

叔父 「返せ。」

ルベン 「離せよ。」

叔父 「返せたら。」

ルベン 「離せたら」

叔父 「返せ！」

ルベン 「離せ！」

N その時、何かが右手に触れた。俺は無我夢中でつかんだ物を力いっぱい振り下ろしていた。

—ガッチャー—

N 気が付くと、俺は割れた壺を握りしめ、足下には血塗れになった叔父が倒れていた。

叔母 「ひ、人殺し！」

N 叔母の叫び声に家を飛び出すと、一目散に夜の闇の中へ駆け出した。金の袋をしっかりと握りしめて。

<後編>-----

モノ 「殺した。俺はこ、この手で人を殺したんだ…。はは、ははははは。」

N 14の時、俺は初めて人を殺した。つらくあたる叔父から金を盗み、気付いた叔父の顔を、力まかせに壺で叩き割ると、奪った金を手に無が夢中で走って逃げた。故郷のナザレを後にした俺は、都エルサレムに向かった。それからは金のためなら何でもやった。強盗、恐喝、ばくち、酒、女。一度人殺しをした俺に恐いモノは何も無かった。金は面白いほど懐に入ってきた。10年も過ぎる頃には、俺は都でも有名なお尋ね者になっていた。そんなある日…。

ダン 「おい、ルベン。最近偉い羽振りだってなあ。俺にもおごってくれよ。」

ルベン 「なに、たいしたことねえって。」

ダン 「聞いているぞ。大商人の店を襲ったんだって。しこたま稼いだんだろ。」

ルベン 「知ってるのか？しょうがねえな。」

N 俺と仲間のダンは変装して街にくりだした。日頃のローマ帝国の圧制を忘れたように、エルサレムは過ぎ越しの祭りで賑わっていた。ほしいちじく、なつめやしなどの果物、葡萄酒、ガリラヤ湖で捕れる魚、家畜、たくさんの品物が市場で売り買いされる。祭りは1週間続くのだ。

(街の喧噪。物売りの声)

ダン 「おっ、何だ、あれ。」

少女 「ホサナ、ホサナ。ダビデの子に栄光あれ。」

少年 「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」

少女 「ホサナ。いと高き所に。」

N 見ると、人々が門の所に列をなして群がっている。子供も大人も、ある者は棕櫚の若枝を打ち振りながら、ある者は着ていた上着を道に敷きながら喜びの声を挙げていた。

ダン 「ははあ、救世主、キリストのエルサレム入城ってやつか。」

ルベン 「何の事だ？」

ダン 「俺たちユダヤ人をローマから救ってくれるお人だとよ。だけどよ、あんな貧相な男が救い主のわけがねえ。」

N ダンの言うとうりだった。大群衆に迎えられたのは、小さなろばに乗った痩せた男だった。粗末な衣服を着ており、従っている男たちも同様で、どこから見ても田舎者と思われた。

ルベン 「あんな人数でしかも、武器もなしで天下に名高いローマ軍と戦うつもりなんだろうか？ 待てよ、あの男には見覚えがある・・・。」

N 確かにあの静かな微笑み、やさしいまなざしには出逢ったことがある。ぼんやりとした記憶をたどろうとしたときだった。

ローマ兵1「おっと、やっと捕まえたぞ、ルベン。」

ルベン 「何だ、貴様は？」

ローマ兵2「騒ぐな。祭りの最中だ。お前も生き恥をさらしたくないだろう。」

N いきなり両腕を屈強なローマ兵につかまれた。どんなにもがいてもほどけない。

ルベン 「ダン、ダーン！」

N 見ると、ダンは少し離れて、にやにやしなから立っている。

兵士1 「お前、仲間に売られたんだぜ。」

ルベン 「ダン！」

ダン 「悪いな。ルベン。ちょっと借金がかさんでよ。」

ルベン 「いくらだ？いくらで売ったんだ？」

ダン 「ぎ・・・銀貨5枚。」

ルベン 「それだけか。安く見られたもんだ。このルベン様も・・・。」

兵士2 「つべこべ言うな。こっちに来い。」

N 俺はついに捕らえられた。不思議にダンを恨む気持ちもわかなかった。いつかこんな風に俺の人生の幕が閉じるのを予感していたからかもしれない。

裁判官 「アカンの子、ルベン。お前を強盗、恐喝、殺人の罪で、十字架刑に処す。」

N こうして俺はゴルゴダ、「どくろ」という名の丘で十字架に架けられた。時は朝の9時。刑罰を受けたのは3人。俺は右側、もう一人の強盗は左側。真ん中にイエスという預言者。やがて昼頃になると、太陽は照りつけ、喉が焼け付くようだ。打ちつけられた釘の痛みが容赦無く襲いかかる。イエスという男は苦し

みも余程強いのだろう。体力のある俺とは違い、ぐったりとしていた。いばらで編んだ冠が額をきつく締め上げて、流れ出した血が顔をつたっている。無数の鞭で打たれた傷跡が痛々しかった。

男 「見ろよ、あのさまを。」
子供 「何だかかわいそう。」
母 「あなりや、神の子も形無しだね。」

N 彼らの背後には、律法学者や祭司長もいた。

律法学者 「あの人は他人を救ったのに、自分は救えない。十字架から降りてみよ。」
祭司長 「神の子なら、自分を救ってみよ。そうしたら信じてやろう。」

モノ 「あんなにあざけられ、ののしられているのに何故彼は穏やかなんだ。それにあの目。確かにあの優しい眼差しには覚えがある。。。」

少年 「(回想)神の国は心の貧しい人、悲しんでいる人のものなんだよ。」

モノ 「あっ、あの時の、あの時の少年だ。」

N 確かにそうだ。イエスこそ、お袋が死んで悲しんでいる俺と一緒に歩いて慰めてくれた、あのナザレの少年だった。あの時と同じように、イエスは優しい目をして俺のそばにいた。兵士たちが、イエスの着物をくじ引きで分けようとしている。そのとき俺は、イエスがわずかに顔を挙げ、祈るようにつぶやく声を聞いた。

イエス 「父よ。彼らをお許してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

N 俺は耳を疑った。

モノ 「この人は無実の罪で自分を処刑しようとしている奴らのために、この人は神に祈っているのか？ それに、神に『父よ』と、呼びかけている。本当に..本当にこの人は神の子なのかも知れない。。。」

N そのとき俺は、自分もイエスに祈って貰いたい、と思った。神に赦しを願いたい。汚れきったこの俺のためにイエスに祈ってもらいたい。。。心の底からそう思った。

モノ 「赦してもらえなくてもいい。祈ってもらえるだけで。こんな罪深い俺を思い出してもらえるだけで・・・。」

強盗 「あんたはキリストだろ。自分と俺たちを救ってくれ。」

ルベン 「おまえは、神をも恐れぬのか？おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いをうけているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

N そして俺は、やっとの思いでイエスのほうに顔を向けて、言った。

ルベン 「イエスさま。あなたが天の御国で王の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

N すると、イエスは俺にあの優しい眼差しを向けて、こう言ってくれたのだ。

イエス 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

モノ 「イエス様と、パラダイスに？この俺が・・・罪深い、この俺が？」

N 何という幸せだろう・・・。故郷のナザレの家、預けられた叔父の粉屋、そして我が物顔に幅をきかせた都の悪党たちの世界にさえも、俺の居場所はなかった。この世には俺を受け入れてくれるところは、どこにもなかったのだ。そんな俺が、神の国に迎えてもらえるなんて・・・。

N 昼間だというのに、突然辺りが暗くなった。まるで天地がこの方の死を悲しんでいるようだ。
一時が過ぎ、午後 3 時になった。そのときだった。

イエス 「事は完成した。父よ。我が霊を御手にゆだねます。」

N イエス様はそう言って、息を引き取られたのだった。・・・この俺も神の国で、このお方とお会いできるのだ・・・、体から力が失われていくのを感じながら、俺は静かに喜びをかみしめていた。

< 完 > -----